

13
1928
1-5

一週りかゝり

但一日一夜らと見科同改る座作
け外現うと味縁か一物取ふと并
藥種柳骨柳中土產物何ぶと
用も終付て中作

但州湯崎中庭甚な庭

但馬
伊原長光齋
湯崎



序

朽々々木姑いまめもすすれ下孫々
夜衣日暮黄昏小ぢれと。嗚嗚々々
とびあうれ 絶ぬぬん。海芳ハ深川
の毛小ぢえ 艶書あやふみの荒小あそび。橋はし
いど高嶺たかねの雪ゆきか 履はきぬ家いへぬ。
危あや岐まといるはたきまきまのえうぬくまぬく
於おりひひ準繩すな小こ糸いと。維ま波なみ江えのことはく
—てらきぬ—とかぞへちまのあまのあまのあまのあま



よの誤心やとかく孫小玉母と孫で序
をこふ 孫と 婦婦姑 祐中かたぐれとれま
忽此事を執て其のそと忘るそこれも
とてこれの穴をと 禮さうとのれ白川の
流る 祝する 漱石叙

天明二姑と一春迄き、秋

も流る、此公治長らく鳥語、海世
人あふ、ふかやうに徒然、糶の川と
二、海双、例の五、考あり、當世乃人、情、
文、勢、不、母、身、ふ、流、行、の、新、語、は、筆、力、
に、盡、す、さ、流、る、か、の、里、を、免、の、鳥、渡、
に、海、を、流、る、を、免、の、鳥、渡、

うゝもあはれしあゝ人けを以て関し。
能くぞのふ惜哉中品以下乃情は
親けふのふとていすも高擧金圍の起
し難しと余謂ふ新志をまをせんとて
おはせむがまをいふありき。然るには
世のそとをばはきむじのいふもあはれ。

あはれはあはれしあゝ人けを以て関し。
いふちねがらにすまゝあらむおなもつこ也
おうゝれといふ一乃大通もやはあ
されど竹葉と葉一皆桃紅のほきを
追ひせし横江を遊客より。害は情は
よてちん玉袖の川に。及のやうに

頼^{ちか}りたりと人自^{みづか}らつむおのじふあきあ

うゝも花^{はな}の中^{なか}をかくやはき私^{わたくし}情^{なさけ}のた

わき入^{いり}ぬもあひあじり洒^{しやれ}落^{おち}風^{かぜ}流^{なが}る

片^{かた}花^{はな}くなれを情^{なさけ}のなごころ

粹^{すい} 泣^{なみ}きうらうらあゝあゝあ

壬寅^{みづのへ}乃^のあしくとれ月の夕^{ゆふ}彩^{いろ}

松^{まつ}第^{だい}庵^{あん}の西^{にし}の窓^{まど}子^こ足^{あし}杖^{つゑ}のて存^{ぞん}在^{ざい}書^{しよ}之^し

つれく瞬^{まじ}川^{がは}一^{いつ}之^の巻^{まき}

花^{はな}終^{はら}くぬるゆふ小^{この}ま日^ひくじれ巨^こ煙^{えん}

ふりつてふのうらま拵^{もち}くゆあしど

残^{のこ}拵^{もち}こましくぬくうさ^{うさ}は信^{しん}ぎま^まハ河^か房^{ぼう}

らしくしや^{しや}まのさうしきい^いでや

ひ^ひぎとくと拵^{もち}さい^{さい}ゆてあり。祢^ねが^がハ

るごさい^{さい}判^{はん}こそおがうられ^{られ}人の女^に房^{ぼう}

髪丈がどいともかそらし。地がこれあ
 のぬきまぐひまで。人百のをぬるふそ
 慈も無き妓娘子をみどらうくさハ
 なやふそしゆ。ま介海家と茶屋中兵
 だど六。ちと志由さうさふしゆきどあや
 うらや命し。そきさうり下りさし。飯焚の
 類。時ふやきつ。おふ出今。さうさハ
 志らりとがめさくめといとさうさ。お
 田舎

ちややどらうちや。かぬそのハあし
 が婦婢女小も野暮れやうにおりた
 ろ。と。お深久雲ふしひ。もさるるゆか
 き。全報の威勢と鼻れ先く出さ
 権柄小雲りかど。河原房とたさゆき。全
 持自慢さるる者ハ。此我のほ一形。あ
 の瞬といとらう人ハ。偃小もを平樂ハ
 いひ出さん。こあら料理人さ小もことば

流しく。寶もあまりとどまらぬ。江神。人
と何とやら。愛敬あつていせとあつと
瞬ちとはいらぬ。んてら後のうし何
こそ。せれおあきハひくもせん。瞬ハ公
のおやうされし。瞬ふがもんとおまハ
瞬にすれぬ申ハあし。まづ瞬の
んぐけたら。この琴三徳せん。まも紀
ハ申く。んら。おまの。もいどハし

琴も。ハ。ぬるハ。奥に。りて。おの
艶書のうきやう。ぶ。かく。い。え
やとく。も。ち。う。さ。か。う。れ。も。し。ら
うき。あ。も。ち。よ。と。流。行。袂。う。ま
わ。ど。ち。う。と。梅。子。う。く。一。は。の。海。合
酒のおん。ハ。戸。な。う。ぬ。わ。ど。ハ。た。し
の。き。う。き。の。ぬ。り

月
打



肆
一

肆
一

七

ほととぎすんだしハ妹のご姿も。烟爰れ仕立
— 烟草入のお好ハもはらり
つゝまのさうりくかろ。是の尻先まで
あせふんとく。て。唐のやまこの
書ごものぞろ。石臼。磨れ。粉を。お
のが。家。書。れ。えら。ふ。う。と。く。月。小。花
ふ。う。さ。は。ら。ら。い。文。育。か。親。父。の。矢
見。無。は。なる。春。持。の。よ。代。い。さ。免。馬。乃

年小風の吹もあつぬ。おも。妓の顔
ら。や。夜。心。す。ま。ん。西。月。れ。お。ど。り。ハ
三月の二日。夕。夕。く。何。り。く。涼。の。き。ひ
す。う。う。ふ。七。月。と。あ。し。月。と。あ。し。信。金。の
身。れ。も。る。べ。さ。ら。お。く。う。け。こ。ら。記。茶。や
ふ。ち。と。して。花。神。書。れ。徳。の。葉。さ。か。ら
茶。碗。柄。の。布。袋。れ。と。漬。は。く。し。て
う。り。う。く。こ。ら。と。ま。し。れ。肌。と。あ。つ。て。妓

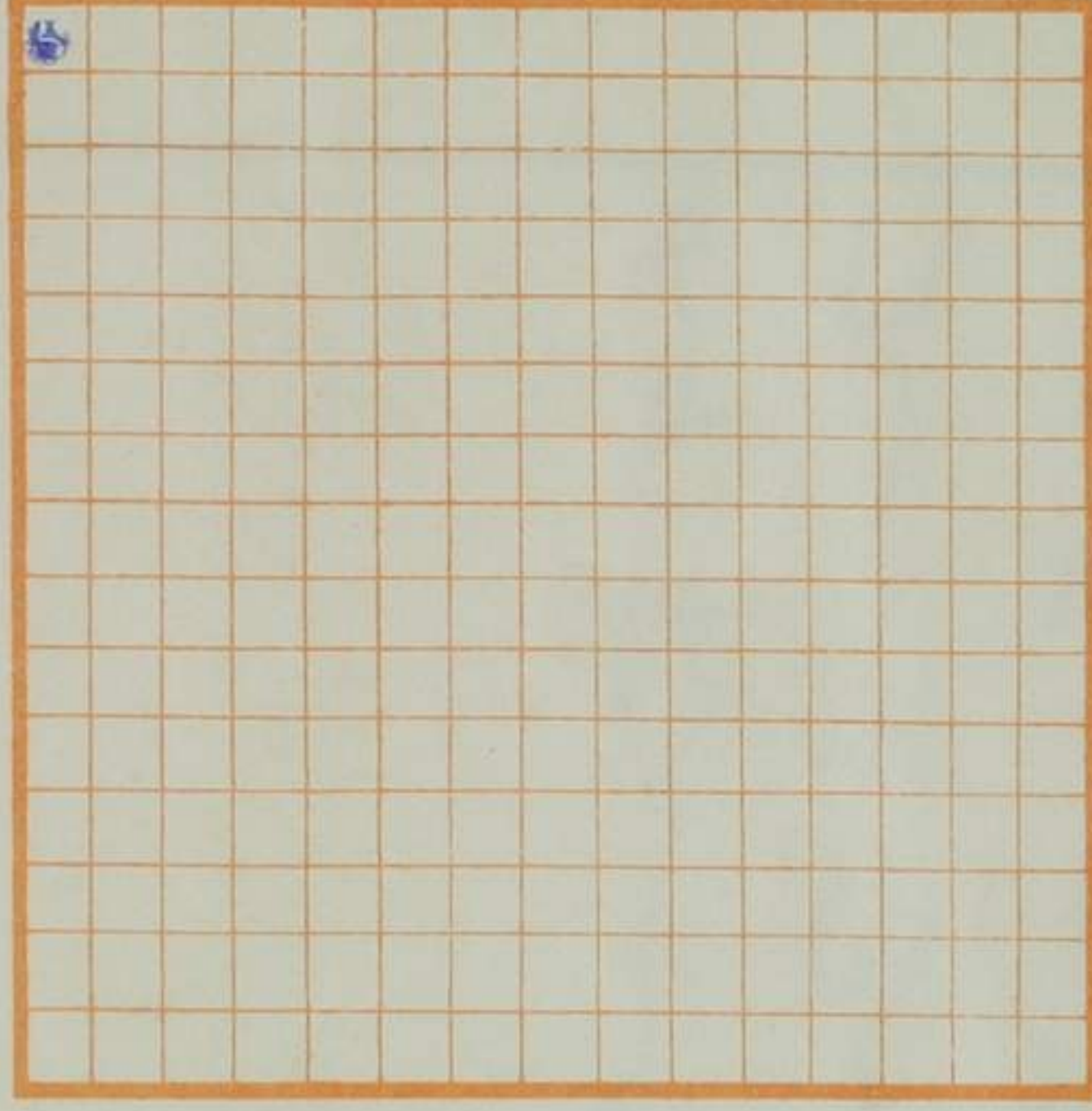
の常根つねねまで小切せききとめざら
秋風あきかぜ起おこく白人はくじんぐさくじやとほし
の屯とんも春はるとやういふと求めもとめ秋あき枝えだハ
店てんの仕しねとがとほと屯とんハ下したろ後ご作さく
あしてあててみみ又またううれれききししかりかりかららさ
むむりりうう櫛くし鬘まげ捲まきも傷やぶるる根ねふふあありりててハ
ううあありりててハ切き担たん言げんああるるハおおややト
と連つらててののををああららいいののはは伝でんももその

れハ長なが所ところ迄いたでほほううままくくらられれてて長ながの
が定さだ法ほう形かたちれれどどううかかららんん又また一ひと通と
の掬あびびももささううかかららハ始はめめををひひ
うう糸いとをを又またふふささううかかららひひ何なにか
とも入い念ねんををととささららくくのの款くわんおおくくまま
かりかりううららひひままののじじややととねねりりややごごららり
坂さか小こ車くるま乃な先せん年ねん所ところれれ迄いたりりととううううひひ
大だい糸いとのの橋はしのの中なか通とひひああららひひててららりり。みみの

このれのおまね世合ぶら〜と金れま
ぢづり。四まおろくの雲行と心ごさ
ゆ〜。ま〜ちりのいとぬり耐はごん
ちる妻切る哉解すどの常喰ひい
なやとらの危さあふ。たぬくれ仕合
せ〜た。愛〜このひろひ極の〜燃杭ふ
ハ火の付やとく〜川のりふや後家
兼屋ごぢづり。毎日〜は幸出の

手焼ひ。月の入日ハ拂のを活。たら祢ハ
た〜とゆすまはふと〜ろ入てゆ〜と
胸算帳ハゆけきども。はひふあま
こ〜ゆもん〜だ。又生志〜け〜あ
出入もれし。付合先の兼屋まで吃味
〜してのま〜ん。ま。ちのけ〜う〜いあも
冷牙〜かち〜その不敏承昌。はまる義
ハその糸のやけい。すふひさ。於少ひ

4年7月



果は祝の儀の家屋を。目か夜

は舞ふきと先し。いまに
はくれか。いづきか
ひらき。ふらき

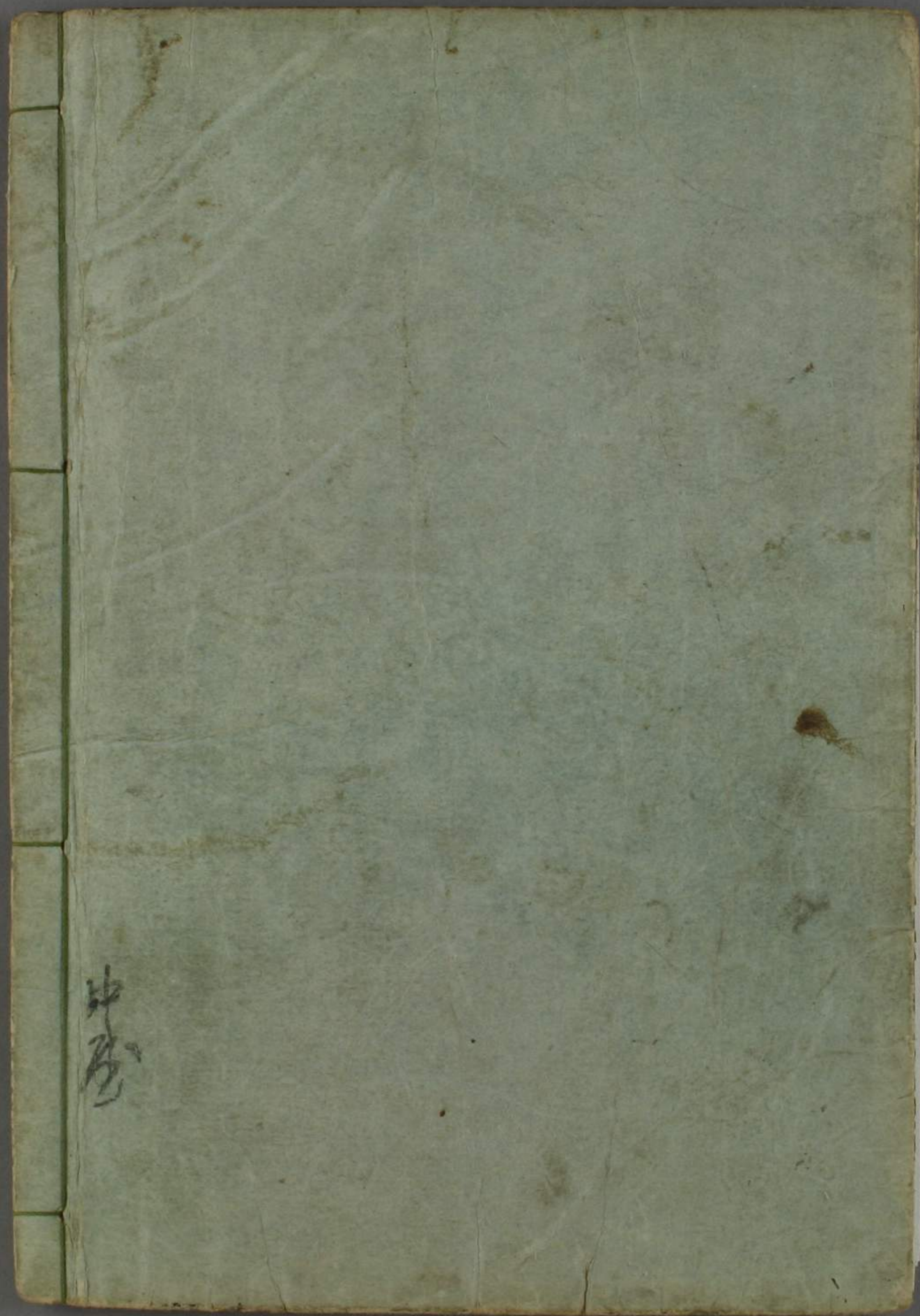
つれく瞬々川を之に後

竹貫ゆき
糸のひた
あぐら
まはるのり
佐藤の湯
中夜長

三。果は祝の儀の家屋を。目出夜
 うり拂く仕舞ふき免し。いまに
 むし。小海くま。れか。いづ。か
 そ。色。は。く。む。じ。さ。い。く。ふ。い。せ。

つれく癖、川喜之、後

此書は
 糸口
 子
 中夜喜之



坤
卷